SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

ポール・ヴァレリーの存在：フェスティバル「ポール・ヴァレリーと地中海」の記録から

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学人文社会科学部 公開日: 2022-08-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 安永, 愛 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00029090

ポール・ヴァレリーの存在
―フェスティバル「ポール・ヴァレリーと地中海」の記録から―

安　永　　愛

はじめに

フランス第三共和政期を代表する詩人・思想家ポール・ヴァレリー（1871－1945）の生地である南仏の港町セート市は、2011年より毎年初秋の数日、彼の名を冠した市の美術館（ポール・ヴァレリー美術館）に研究者や詩人・芸術家を招聘し、ヴァレリー・フェスティバル[1]を開催している。フェスティバルではヴァレリーにまつわる数々の講演が行われ、ヴァレリーの詩や、ヴァレリーに影響を受けた詩人たちの作品が音楽と共に朗読される。ヴァレリーにまつわる絵画展やミニコンサートなども企画されている。地中海を見下ろす高台に位置するこの美術館には美しい庭があり、天気が良ければ庭が集いの場となり、聴衆たちは潮風に吹かれながら、心地よい木漏れ日の中で、ヴァレリーの世界に浸る。

このフェスティバルは毎年テーマが掲げられており[2]、第８回目に当たる本

---

[1] フランス語のイベント名は « Les journées Paul Valéry » である。« journée » とは、日の出から日没までの時間、日中を意味する。journéesはその複数形なので、直訳としては「日々」ということになるが、フランス語圏にはjournées～と題した数々のイベントがある。本論文では、仮にjournéesをフェスティバルと訳したが、「祝祭」という言葉に近いフランス語としてはfêteがある。ヴァレリーにまつわるセート市の当イベントにfêteの語が採用されていないのは、イベントの非日常性を担保しつつも日常との繋がりも意識するという基本姿勢や、宗教性から自由なライシテ的感受性と関わっていると考えられる。日本語のカタカナの「フェステバル」の語感の宗教性は強くなく、非日常性や祝祭感は感じられるので、フランス語のjournéesの訳語として採用できると判断した。

[2] 第１回目から2021年までのテーマは以下の通り。第１回（2011年）ポール・ヴァレリーへの眼差し／第２回（2012年）同時代人　ポール・ヴァレリー／第３回（2013年）親しき鏡に照らし出されたヴァレリー／第４回（2014年）ポール・ヴァレリー　知性と官能性／第５回（2015年）ポール・ヴァレリーと科学／第６回（2016年）ポール・ヴァレリーと作家たち／第７回（2017年）ヴァレリーの街　セートとジェノヴァ／第８回（2018年）ポール・ヴァレリーと地中海／第９回（2019年）ポール・ヴァレリーと画家たち／第10回（2020年）ポール・ヴァレリー　失われた詩、見出された詩／第11回（2021年）ポール・ヴァレリー　詩人、思想家、人間。

フェスティバルのテーマは「ポール・ヴァレリーと地中海」であった。第８回目のフェスティバルはポール・ヴァレリー美術館のみならず、コルシカ大学も協賛し、ヴァレリーの父親バルテルミー・ヴァレリー（1825－1887）の生地であるコルシカのゴルト、バスティア、エルバルンガの３つの会場でも「ヴァレリー　地中海とコルシカ」のタイトルのもとに開催された。セートのポール・ヴァレリー美術館での９月21日から23日までの３日間とコルシカでの10月18日から21日までの４日間のフェスティバルの成果は翌年、ファタ・モルガナ社より、『ポール・ヴァレリーと地中海』[3]のタイトルで、ヴァレリーによる美しい水彩の海景画の装丁を施した460頁ほどの書物として刊行されている。本論文ではファタ・モルガナ社の『ポール・ヴァレリーと地中海』やフェスティバルのプログラムを主要コーパスとして、フェスティバルの時空に喚起されるヴァレリーの存在について論じる。

１．ヴァレリー・フェスティバルという時空

2011年に始まったヴァレリー・フェスティバルは、ポール・ヴァレリー美術館を主催者とし、アカデミー・フランセーズの後援を受けている。ヴァレリーの生地である小さな町（セート市の人口は約４万人）の催しであるが、国家的な後ろ盾も伴っているのである。

第１回から今日にかけてフェスティバルの統括を務めるのは同美術館館長で文化遺産学芸員長のマイテ・ヴァレス＝ブレドである。ヴァレス＝ブレドは、1998年にフェスティバル「生の声、地中海から地中海へ」[4]を立ち上げ、毎年、地中海沿岸の国々の数多くの詩人たちを集めるこのイベントの統括を務めている。こうした経験も、ヴァレリー・フェスティバルの立案に当たって生かされていると見受けられる。フェスティバルには、フランス国内外の研究者、翻訳家、詩人、美術家、音楽家、俳優、そしてヴァレリーの親族が招聘されており、そのバランスが絶妙である。さまざまな出会いの可能性の種が、実に巧みに蒔

フェスティバルの翌年には、フェスティバルのテーマをタイトルとした記録の書物が毎年ファタ・モルガナ社より刊行されている。2022年７月現在、第10回までのフェスティバルの記録が出揃っている。セートのポール・ヴァレリー美術館のみならず、コルシカでの成果も収めた第８回の記録の書物は、10冊の中でも突出して分厚い。

[3] *Paul Valéry et la Méditerranée,* Musée Paul Valéry, Editions Fata Morgana, 2019. 本書への参照については、以下*PVM*の略号と頁番号で記す。

[4] « Voix vive, de Méditerranée en Méditerranéen »

かれている。ヴァレリーの〈存在〉を、彼の生まれ眠る町の風光の中で共に感じ取ること。フェスティバルに集う人々がそうしたことを経験できるよう、工夫が施されている。

また、このフェスティバルにはソルボンヌ大学教授でヴァレリー研究者であるミシェル・ジャルティが一貫して関わっていることも重要である。ヴァレリーの実証的研究、理論的研究のいずれにおいても最前線にあるジャルティがフェスティバルに関与していることが、この催しの学問的水準をも担保している。

フェスティバルのメイン会場であるポール・ヴァレリー美術館の元となったのは、1891年にセート市街に建設されたセート市美術館である。1945年、ヴァレリーの死の直後に、妻ジャンニーはヴァレリーの所蔵品をセート市美術館に寄贈することを決めた。1970年には、地中海を見下ろすモン・サン・クレールの丘に、ポール・ヴァレリーの名を冠した美術館として新たに開館した[5]。ポール・ヴァレリー美術館はヴァレリーの眠る「海辺の墓地」[6]を見下ろす位置にあり、目の前には地中海の絶景が広がっている。コルビジェの美学に則ったギ・ギヨーム設計の白を基調としたシンプルな外観は、地中海の青や糸杉やオリーブの木などの植栽と爽やかなコントラストを見せている。同美術館は、セート出身の美術家たちの作品を含む17世紀から現代にかけての絵画作品を展示するとともに、美術館の二階はポール・ヴァレリーについての展示スペースとなっており、ヴァレリーの手稿や愛用品、彼の残した水彩画などを見ることができる。

ヴァレリー・フェスティバルは毎年９月の下旬に開催される。会場に集う聴衆は、大半がシャツやTシャツ、ブラウス一枚のリラックスしたいでたちである。本フェスティバルの雰囲気を語っていると思われる言葉がある。2012年の第２回ヴァレリー・フェスティバルに登壇したチリの著作家ルイ・ミゾンが寄せた言葉である。

> 友情とはおそらく、人がおのずから捧げる一種のオマージュである。それゆえ私は、ポール・ヴァレリーと友達になりたかっただろうか、と自問自答してみた。大変驚くべきことに、その答えは「是」であった。[7]

---

[5] 同美術館の概要については、同美術館の公式サイトを参照した。（URL:https://museepaulvalery-sete.fr）

[6] ヴァレリーの詩集『魅惑』に収められた「海辺の墓地」にちなみ、ヴァレリーが埋葬された1945年、サン＝シャルル墓地に正式に「海辺の墓地」の名が与えられた。

[7] 2012年（第２回）ヴァレリー・フェスティバルの記録『同時代人　ポール・ヴァレリー』*Paul*

ヴァレリー・フェスティバルは、おそらく、ヴァレリーを友のように感じることのできる時空なのだろう。文学研究者というものは、対象とする作家〇〇のテクストに長年向きあううちに、ことあるごとに「〇〇だったらどう考えるだろうか」と問うことを半ば習慣にするようになる存在である。だからと言って筆者はそう簡単にヴァレリーを「友達だ」とは思えないのだが、だからこそ(生きていればその作家と)「友達になりたかった」という思いが作家へのオマージュなのだとのミゾンの発想は、心に響くものがある。

ヴァレリーの存在を感じ取る、あるいはその存在が浮かび上がってくる舞台としてのフェスティバルという時空を意識しつつ、以下の各節において、2018年のフェスティバルの記録『ポール・ヴァレリーと地中海』のいくつかのテーマを読み解いていきたい。

2.「ポール・ヴァレリーと地中海」のテーマの見取り図

ヴァレリーを友のように感じられる場としてのフェスティバルというコンセプトは誠に魅力的である。しかし、それも最高度の学術的研究の成果に支えられていることと矛盾するものではない。本フェスティバルに毎回登壇しているミシェル・ジャルティが、第８回のフェスティバルの最初の講演を行い、「ポール・ヴァレリーと地中海」のテーマについての恰好の見取り図を提示している。講演タイトルは、その総括性の逆を行くかのような「地図学と個人的な歴史に関する小論」[8]という慎ましいものになっているが、注記も含め20頁ほどの小論の中で、ヴァレリーへの批判的な観点も失うことなく、ヴァレリーと地中海を取り結ぶ中核的な問題系を包括的に提示している。ジャルティは、ヴァレリーと地中海を考えるにあたって、「個人の履歴」「歴史・政治的問題」「文学的問題」の三つの領域を設定し論究する。

地中海、ことにセートの海辺での経験がヴァレリーの基本的な感受性を養ったことは、ヴァレリーの珠玉の作品「地中海的感興」[9]や「海を臨む」[10]に記されている。しかし、ジャルティは、ヴァレリーが成人してから実際に足を延ばした海辺にはセートの他、ブルターニュのペロス＝ギュレックやジアン半島など

Valéry comtemporain, Fata Morgana, 2013についてのファタ・モルガナ社のサイトより（URL :http://www.fatamorgana.fr/livres/paul-valery-contemporain）

[8] Michel Jarrety « Petit essai de géographie et d'histoire personnelle » *PVM*.13-34.

[9] Paul Valéry « Inspirations méditerranéennes »

[10] Paul Valéry « Regard sur la mer »

もあり、執筆の場所のイメージが作品や『カイエ』に反映しているとの指摘を忘れない[11]。

また、ヴァレリーのテクストに頻出するギリシャへの言及は、実際のギリシャと結びついているものではなく「ギリシャ的なもの」という観念に結びついたものであることを、パリ国立図書館草稿部所蔵の「ギリシャ人と我々」と題されたヴァレリーの未公刊テクストに触れながら指摘している。ジャルティは、その草稿の中から以下のような言葉を引いている。

> ギリシャ人にあっては、「知性」が抽出され、「抽象の美学」と呼べるもの、「存在の芸術」というべきものが生まれてきたのだ。[12]

ジャルティは、このようなヴァレリーのギリシャ人像に関して「想像のギリシャ人」を尊ぶヴァレリーの相貌を喚起している。ヴァレリーは実は、一度もギリシャに足を運んだことがないのである。1938年に仏希協会の招きでアテネに滞在する予定であったが、叶わなかった経緯があるという[13]。ヴァレリーにとってギリシャは、あくまで「神話」の位置付けであった。神話を生み出す眼差しによってしか過去を眺めることができないからだ。とはいえ「我々がギリシャ人に負うものは、ヨーロッパの外の地域と最も相違している部分である」との言葉をヴァレリーは記している。文章の中で「我々」は「ヨーロッパ人」を指しているのであるから、ヴァレリーは自らの共同体の基盤を想像の神話的存在に見ているということになる。

ヴァレリーが「(想像の) ギリシャ人」に見たのは、不明瞭なものから明瞭なものへの移行、変容の力を理論化したことであったとジャルティは指摘している。プラトン風の対話篇の形を取ったヴァレリーのいくつかの作品に関しても、ギリシャ風は表面的効果でしかなく、古代と現代を架橋することよりも、ギリシャという古代によって「現実から引き離す」(déréaliser) ことにねらいがあったと評している[14]。

1933年、ヴァレリーは南仏ニースに設立された地中海大学センターの初代所長に任命される。第一次世界大戦の苛烈な経験や、1930年代に入ってからの

---

[11] *PVM*.30-31.
[12] BNF Naf 19071 f144.（BNFは「フランス国立図書館」Nafは「新所蔵フランス語文献」の意）
[13] *PVM*.27.
[14] *PVM*.27.

ヨーロッパの政治の危機的状況から、国家主義では戦争の回避が難しいと痛感していたヴァレリーは、国をも超え、ヨーロッパをも超え得る「地中海」のテーマに可能性を感じ、意欲的に取り組もうとする。しかし、ヴァレリーの著述には、地中海域に関わるはずのイスラムについての言及はなく、また植民地の問題に関する視点も欠落しているとジャルティは論及する[15]。ヴァレリーは、1936年にアルジェリアのチュニスに滞在して講演を行い、現地の人々に「高貴さ」を見たと記し、また「北アフリカの復興」というコンセプトも記しているにもかかわらず、たとえば自国の植民地主義政策に対する批判的な観点は見られないのである。

ジャルティは、このようにヴァレリーが「地中海」のコンセプトに見ようとした理念（理想）と、ヴァレリー自身の政治的歴史的な思考の限界を明瞭に描出している。

ジャルティは、ヴァレリーの「地中海」を最終的には文学的なメタファーとして捉えている。ヴァレリーの有名な詩「海辺の墓地」のタイトルが最初の草稿段階では[16]、ラテン語で « Mare nostrum »、すなわち「我らの海」（それは、地中海のローマ式の呼び名である）であったことにジャルティは着目し、「海辺の墓地」は地中海の一種のメタファーであり提喩であると結論づけている[17]。ジャルティは、「現にある滅びるものとしてのオリーブの樹を思う」といったものでは決してないヴァレリーの詩を観念化されすぎているとする詩人イヴ・ボンヌフォワの手厳しい批判[18]に言及しながらも、あらゆる限定を超えていくヴァレリー独自の詩法を浮き彫りにしている。

3．ヴァレリーの思考と感受性の源泉としての地中海

フェスティバルには、ジャルティの他にも研究者が複数登壇し、「ヴァレリーと地中海」のテーマに関し、それぞれの視点を打ち出している。ヴァレリーの思考と感受性の原点としての地中海というコンセプトは多くの研究者に共通である。そうした論考の中から、まずジャン＝ルイ・シアンニの論考を紹介したい。シアンニはセート生まれでモンペリエ大学にて教鞭を執っている。まさに

---

[15] *PVM*.19.

[16]「海辺の墓地」の初稿はポール・ヴァレリー美術館に所蔵されている。

[17] *PVM*.31.

[18] Yves Bonnefoy *L'improbable et autres essais*, Gallimard, 1992, p.99.

ヴァレリーの青年期までの生活圏[19]に暮らす哲学者でもある。フェスティバルのプログラムのプロフィール欄には「教育哲学者、ジャーナリスト、コミュニケーション・マスター」[20]と記されている。主著に『失業の治療薬としての哲学』(アルバン・ミシェル社、2007年)『母と哲学者』(ル・ボールド・ロ社　2010年)、『海辺で哲学する』(アルバン・ミシェル社、2016年）がある。プロフィール欄には「ヴァレリーの愛読者」とも記されており、プロパーのヴァレリー研究者とは一線を画す存在のようだ。シアンニの講演タイトルは「ヴァレリーとともに地中海を考える」[21]というもので、一般の人々に開かれたスタイルを持っている。シアンニのこの講演の結論部分を以下に訳出する。

> ヴァレリーの考察には、処方箋や予言的なもの、罪悪感を抱かせることを目的としたものではありません、我々の心に、生きてあることの確かなリアリティを多々喚起してくれます。快楽的で官能性に満ちた海である地中海は、生きる喜び、存在することの喜びを喚起します。地中海は、人間であることの喜び、神や一神教に頼らずとも人間であれること、人間性を信じることのできる喜びを与えてくれる。そして地中海はついには文明の善行へと導いてくれるのです。すなわち平和、精神の高揚、協力、他者性の追求へと。[22]

シアンニは、講演冒頭でまず、ヴァレリーの地中海に関する考察が両大戦間に記されていたことについて触れている[23]。シアンニの講演は、地中海に関するヴァレリーの論考が時代の危機意識といかに深く切り結んでいるかについて語るものであった。在野の意識を強く持っていると思しきシアンニは、現代社会に蔓延するニヒリズムを超える哲学を求め、ヴァレリーの地中海に関する論考に見られる論理と感受性に大いなる希望を見出しているのである。

次に、パリ第８大学名誉教授で、1992年から1998年にかけパリの国際哲レージュのディレクターを務めたジャン＝ミシェル・レイの講演を取り上げよう。

---

[19] ヴァレリーはセートに生まれ、13歳の時、父親の転勤によりモンペリエに転居し、モンペリエ大学法学部を卒業している。

[20] 第８回ポール・ヴァレリー・フェスティバルのプログラム18頁。

[21] Jean-Louis Cianni « Penser la Méditerranée avec Paul Valéry », *PVM*.53-72.

[22] *PVM*.72.

[23] *PVM*.53.

講演は「起源の場」[24]と題されている。講演録のエピグラフには、「私は始まりから始めます／私は港に生まれました（・・・）／それが私の起源の場です」[25]とのヴァレリーの「地中海的感興」の一節が、まるで詩のようなレイアウトで掲げられている。そしてこのジャン＝ミシェル・レイの講演では、その「起源の場」すなわち地中海からヴァレリーが与えられた思考と感性の本質が追求されている。

ジャン＝ミシェル・レイの著作の対象作家は、フロイト、ニーチェ、アルトー、ヴァレリー、ミシュレ、トーマス・マンなど、多岐に渡っている。レイは学問的ジャンルの掟よりも、自己の内在的な興味関心の強い促しに沿って読み、書く人であり、何よりも作家のテクストの一言一句を « minutieusement »（細心の注意を払って）読むことを己れにも指導の学生にも厳しく課していた。作家に関する新資料だの、学会の潮流だのには概して恬淡で、「書物」に向き合う「私」に到来するものに意識を集中させていたレイの姿が浮かぶ[26]。テクストに向かう意識の明晰さが、氏の著作に一種詩的と言ってよい簡潔さと透徹を与えている。ジャン＝ミシェル・レイのヴァレリー・フェスティバルでの講演にも、そうした姿勢や特質が感じられる。

レイが照準するのは、小高い丘から地中海を眺めるという体験がヴァレリーに与えたものである。海は、結局ヴァレリーにとって、対象でもテーマでもなく、「眼差させる」ものであり、見ることへの「呼びかけ」だったとレイは結論づけている。レイはヴァレリーの「地中海的感興」のテクストの詳細な読解から、文学史的な見通しも示し、ヴァレリーの地中海についての散文は、ランボーの詩「永遠」を引き継ぎ更新したものであり、ヴァレリーは新たな「海の詩」を書いたのだと述べている[27]。また、ヴァレリーと同じく1930年代の危機感を共有していたワルター・ベンヤミンが、ある論考の結論部でヴァレリーの「テスト氏航海日誌」の一節「思考の岬に常に立ち、限界や物事や光景に目を見開いている人」を引用している[28]ことに触れ、レイは「見る」ことが「考える」ことの促しであり、呼びかけであるようなヨーロッパ近代の精神のありようを描

---

[24] Jean-Michel Rey « Un site originel », *PVM*.249-261.

[25] Conférence de 1933. « Inspirations méditerranéennes » *Œuvres*,tome 2, LaPochthèque, p.438.

[26] 筆者は1996年から1999年にかけてのパリ第８大学大学院留学時にレイ教授に指導を仰いだ。授業のレポートや論文の草稿を見ていただくたび、« minutieusement » という言葉を口にされた。一方で、「解放の神学」についての論文が書斎の机に置かれているなど、「文学」「哲学」と専門を括ることができないほど関心を広く持たれていたことが印象深い。

[27] *PVM*.256.

[28] Walter Benjamin, *Œuvres*,t.3, *Gallimard*, p.328.

出している。テクストの仔細にわたる読解と、関心の広さが生きた講演である。

シアンニ、レイの他にも「翻訳すること―ヴァレリーにおけるある種の相対主義のパラメータ―」[29]と題して講演したダビッド・エルデの「ヴァレリー的コギトとは翻訳できないことへの翻訳の呼びかけではないか」[30]といった仮説や、当時、辞書に掲載されていなかったrelativer（相対化する）やrelativable（相対化できる）といったシロジスムを生み出していたヴァレリーの根本にあった相対主義が地中海と関連している[31]といった仮説も実に興味深い。また、元ノルマリアンの若手研究者レミ・フルラネットの「ヴァレリーの私的回想における地中海」[32]と題した講演も、ヴァレリーの詩篇「帯」の起源を、ヴァレリーが子供の頃から抱いていた海（地中海）のイメージにまで遡って実証的に示しており示唆に富む。

４．知識人としてのヴァレリーと「国際連盟」「地中海大学センター」

前説においては、地中海に培われたヴァレリーの基本的な感受性と思考にまつわる講演に言及した。本節では、長編詩『若きパルク』でフランスの文壇に迎えられ、半ば第三共和政フランスの欽定詩人のような役割を担わされていたヴァレリーの、国際的知識人としての活動に着目した講演を紹介したい。

まず、ミシェル・ジャルティの「ヴァレリーと地中海大学センター」[33]を取り上げよう。セートでのフェステイバルの初日に前述した講演「地図学と個人的な歴史に関する小論」で、「ポール・ヴァレリーと地中海」のテーマに明快な見通しを与えたジャルティは、コルシカでのフェスティバル（こちらは「ヴァレリーとコルシカ」のテーマが掲げられている）では、ヴァレリーが1933年に初代センター長に就任したニースの「地中海大学センター」にもっぱら焦点を当てている。ジャルティは、ヴァレリーの文学的テクストのみならず、書簡や公的任務に関わる文書をも渉猟し、ヴァレリーの生の全側面の把握に努めている[34]。この講演からは、ヴァレリーが「地中海」のコンセプトに託した希望と、その

[29] David Elder, « Traduire :les paramètres d'un certain relativisme chez Valéry », *PVM*.101-171.
[30] *PVM*.102.
[31] *PVM*.108.
[32] Rémi Furlanetto, « L'expérience de la Méditerranée dans les écrits personnels de Valéry », *PVM*,p.175-201.
[33] Michel Jarrety, « Valéry et le Centre Universitaire Méditerranéen », *PVM* 289-303.
[34] その成果は1,200頁を超えるヴァレリー評伝として上梓されている。Michel Jarrety, *Paul Valéry*, Fayard, 2008.

希望が歴史的・政治的な理由により、必ずしも結実を見ない現実とが浮かび上がってくる。

そもそもヴァレリーが地中海大学センターの所長に就任したのは、ヴァレリーの経済的困窮を救おうとの当時の文科大臣アナトール・モンジの差配があったとされる[35]。執筆と講演で家族を養っていたヴァレリーにとってはありがたい話であったが、国民国家を単位とした考え方ではヨーロッパの平和を保つことはできないとの認識がかねてからヴァレリーにはあり、そうした国家を超えたコンセプトである「地中海」はヴァレリーにとって希望の光と映ったのである。ヴァレリーは同センターをできるだけ国際的な場、そしてできれば、学士号などの免状を与えるのではなく、人々の自由な聴講の場としたいと考えていた[36]。しかし、地中海大学センターから、学生に講義し単位を与える、という任務が解除されることはなかった。また、ファシズムや独裁主義が台頭しつつあった1930年代のヨーロッパの情勢の中で、センターにどの国のどの講師を招聘するかについては、時の政権の意向とヴァレリーの意向がすれ違うことが常態化していた。ヴィシー政権下となってから、ヴァレリーはついにセンター長再任は叶わなくなる。1939年には、資金的な問題から地中海大学センターは閉鎖されてしまうのである。

こうした困難の中で[37]公的役割を果たそうとしていたヴァレリーの姿勢の中に、ある種のレジスタンス、平和への思いを読み取ることができる。

続いて、ローマ第３大学准教授のパオラ・カッターニの講演を取り上げたい。カッターニは、セートのポール・ヴァレリー美術館では「ヨーロッパと地中海の間に生きるポール・ヴァレリー」[38]と題した講演を、コルシカのバスティアのキャンパスでは「ポール・ヴァレリーと精神連盟―精神連盟の現実的理想主義者」[39]と題した講演を行った。カッターニは文学と政治の関係性や、ヨーロッパの理念、二十世紀初頭の「文芸共和国」などをテーマとする研究者である。フ

---

[35] *PVM*.289.

[36] *PVM*.291-292.

[37] このような背景は、数々の書簡や公的文書読解の地道な積み重ねがなければ知り得ないことである。文学的感性と、歴史家としての周到さを併せ持つジャルティの仕事のエネルギーには感服する他ない。

[38] Paola Cattani « Paul Valéry entre Europe et Méditerranée », *PVM*.75-99.

[39] Paola Cattani « Paul Valéry et la Société des Esprits : un idéaliste réaliste à la Société des Nations », *PVM*.263-283.

ランス語の主著に『精神の君臨—20世紀初頭の文学とアンガジュマン』[40]がある。セートとバスティアでのいずれの講演も、20世紀の歴史や文化の背景への幅広い理解が生きており、ヴァレリーの「地中海」の理念に関しても、フェルナン・ブローデルやアルベール・カミュ、オデイジオの「地中海」理念と比較しながら論じている。1977年にブローデルは「ヴァレリーがなんと言おうと、文明というのは、死すべきものではありません」[41]と述べるのだが、これは、ヴァレリーが第一次世界大戦直後の1919年に発表し、大きな反響を呼んだ「精神の危機」の冒頭の言葉「我々の文明は、今や死すべきものであることを知っています」[42]に対する、ブローデルの返答であるとカッターニは指摘する。カッターニは次のように述べている。

> ブローデルがヴァレリーの言葉を否定したのは、西方キリスト教、イスラム教、ギリシャ正教会の三つの、常に生きている文明を地中海が含み持っているということを強調するためであった。[43]

ヴァレリーの「精神の危機」で「死すべきもの」として擬人化されていた「文明」は実はもっぱら「西欧」(西方キリスト教の）だったのである。ブローデルは、ヴァレリーの地中海の理念への注目に一定の有効性を認めつつも、20世紀の後半を生きる人間として、ヴァレリーの「文明」概念の狭さを受け入れることはできなかったのである。

因みにカッターニ自身は、ヴァレリーの孫たちと研究者たちが同席したシンポジウムで、自らのヴァレリー評を率直に述べているが、評価は以下のようなものである。

> 「地中海のシステム」や「文明を作り出す機械」といったヴァレリーのいくつかの概念に、どれだけ19世紀末のヨーロッパの言説の影響が残っているか、私は明らかにしようと試みてきました。(中略）とはいえ、既存の言説

---

[40] Paola Cattani, *Le Règne de l'Esprit. Littérature et engagement au début du XXe siècle*, Firenze, Olschiki, 2013.

[41] Fernand Braudel « L'histoire », dans *La Méditerranée*, sous la direction de Fernand Braudel, Flammarion, 2017, p.140.

[42] Paul Valéry, « La crise de l'esprit » *Œuvres*, t. I, édition, présentation et notes de Michel Jarrety, Librairie Générale Française, 2016, p.696.

[43] *PVM*.76.

を越えようとするヴァレリーの試みは、当時流布していた「地中海」の典型とは対照的で、逆に意義深く思われます。植民地主義に歴史の一部を重ねる現在の視点からヴァレリーの言説を見るべきではありません。国を超えた融和や調和を可能にするような理念を言語化したことにヴァレリーの言説の意義があるのです。[44]

カッターニは、ヴァレリー自身は、文明の混淆・融合という概念を持っていたことを確認した上で、セートの講演では、「では、ブローデルとヴァレリーを分けているものは何か」と問いを突き詰めていく。

また、ヴァレリーはカミュやオディジオとは違って「地中海的祖国」という言い方はせず、ヴァレリーは国家を超えた次元、個人の観念を維持しつつ、サン＝シモン的[45]なユートピア性も孕んだ「地中海システム」を地中海大学センターの研究・啓蒙活動の中で打ち出したと評している[46]。ヴァレリーが「地中海」のイメージに重ねたのは、「万物の尺度としての人間、政治的要素、都市民、権利によって定義される法的実体、神を前にまた「永遠の相のものに」平等な人間」[47]であったとカッターニは指摘している。

カッターニは、歴史家のリュシアン・フェーブルのコレージュ・ド・フランスでの講義を引きながら、ヨーロッパ的理想と普遍的理想の乖離の問題が存在することを指摘している。ヴァレリーが地中海大学センターの所長に就任した1933年の時点では「ヨーロッパ」の理念がまだ処方箋たり得たが、1944年の段階ではそれを超える必要が生じてきていたという。ヴァレリーにおける「ヨーロッパ」の理念への注目から「地中海」の注目への移行[48]はそれに対応した一つのステップであったと考えられるのである。

カッターニは、コルシカの講演では「精神連盟」という国際連盟の下部組織である知的協力委員会の委員としてのヴァレリーの構想をテーマに語っている。1930年代に入り、ヨーロッパの混迷は深まっていた。国際連盟は国際社会の緊張の高まる中で、満州事変の際に明らかになったように、平和維持の実効力を持ち得なくなっていた。その中で、ヴァレリーは知的協力委員会の議長として、

---

[44] *PVM*.237-238.

[45] その含意は、社会改良主義的な思考、神学からの解放を進歩と見る合理主義的傾向を指すものと考えられる。

[46] *PVM*.92.

[47] *PVM*.93.

[48] 1931年以降、ヴァレリーは「ヨーロッパ」という名称を使わなくなる。

文学者や科学者を招聘し、専門領域を異にする人物同士で現代社会の問題について議論させる「対話」を主宰する。ヴァレリーはそれに類したことを地中海大学センターでも行いたかったが、資金面に問題があり、かなわなかった。カッターニは、ヴァレリーにおける「地中海」も「精神連盟」も同じ一つの必要の二つの顔[49]であったと述べている。ヴァレリーの「国際連盟」における「精神連盟」の構想をどう捉えるべきか考えるためにカッターニはまず、このヴァレリーのコンセプトへの厳しい批判の文書（ジャン・ゲーノ、アンドレ・モーロワ、ジュリアン・バンダ、E・Hカー、デリオ・カンティモーリによるもの[50]）を取り上げる。その上で、ヴァレリー自身のいくつかの精神連盟をめぐる未刊行テクストを含めた直接・間接的な反論を詳細に検討するというステップを踏む。

ヴァレリーの「精神連盟」の理念は、実効性を持たないとのゲーノの反論に応えて書かれた書簡の中でヴァレリーは、「消防士」と「建築家」の区別の提示の形をとる[51]。つまりゲーノは「消防士」を要求しているが、精神連盟が目指すのは「建築家」なのだ、という含意である。またヴァレリーは「精神」と「平和主義」の区別もしている。「戦争を廃絶する」ことよりも、「獣性を除去することに深く関与する」ことを選ぶのがヴァレリーのスタンスである。精神連盟が「無益だ」との批判に対しては、普遍的で根本的な企てを積み重ねたいとヴァレリーは答える。他の批判者たちに対して、ヴァレリーは直接の反応はしていないし、そもそもカーやカンティモリの本もヴァレリーは読んでいない。カッターニによれば、ヴァレリーは国際連盟が実効力を持ち得ていないこと、危機にある事実を認めつつ、それだからこそ、知的協力委員会の意義は大きいと考えていた。カッターニは、ユネスコに所蔵されている国際連盟知的協力委員会の議事録をもコーパスとして、ヴァレリーのスタンスを明らかにし、「精神連盟」の構想を打ち出したヴァレリーについて『永遠平和のために』(1795年）を書いたカントを引き継ぐ位置にあると指摘している[52]。

ヨーロッパの激動の時代におけるヴァレリーの国際的知識人としてのアンガジュマンの、リアリズムに裏打ちされたアクチュアリティについて、カッターニは具体的なテクストの読解を積み重ねる形で、フェスティバルの参加者たちに強く印象付けている。

---

[49] *PVM*.265

[50] 16世紀の宗教戦争やエレジーについての歴史家。

[51] ヴァレリーは「消防士と建築家が必要なのです」と答えている。(1932年３月５日付、ジャン・ゲーノへの書簡）*Lettres à quelques-uns*, Gallimard, 952,p.201.

[52] *PVM*.282.

５．ヴァレリーのインスピレーション―詩と絵画（アンヌ・スラシックの場合）

本フェスティバルの特長の一つは、芸術家が招聘されていることである。このフェスティバルは、フランソワ・コマンネ・セート市長の挨拶に始まり、講演に先立ってアンヌ・スラシック[53]の「ポール・ヴァレリーに捧げる小抽象詩」の絵画展の開催宣言がなされている。スラシックはヴァレリーが残した「小抽象詩集」[54]にインスピレーションを得て、抽象絵画を製作した[55]。会期中、この絵画がヴァレリー美術館に展示されるとともに、アンヌ・スラシックはフェスティバルにて見事な講演[56]を行なった。スラシックがヴァレリーのこれらの散文詩をどのように読み、それを制作に昇華していったのか。芸術家自身が制作の過程について、言葉を尽くすことは稀なことであると思われるが、スラシックの講演には、詩と絵画を結ぶ契機が豊かに語られている。スラシックは、講演冒頭で次のように語っている。

> 「絵画と詩」は往々にして共にありました。詩人と画家の道は交差し、人間的冒険、ヒューマニスティックと言ってよい冒険、そしておそらくは現

---

[53] 1959年、南仏ナルボンヌ生まれ。1981年からフランス各地で個展を開き、ベルナール・ノエルのテクストとのコラボレーションや画文集の制作にも取り組んできた。

[54] Paul Valéry, « Petits poèmes abstraits » ポール・ヴァレリーが『カイエ』上に残していたP.P.A.の符号のついた一連の抽象詩。

[55] 残念ながらこの絵画作品は未見であるが、フェスティバルのプログラム上にいくつかの作品が掲載されているのを、ポール・ヴァレリー美術館のWebサイトにて確認することができる。（URL:https://www.academia.edu/37366985/Programme_Journées_Paul_Valéry_Musée_Paul_Valéry_Sète_21_23_septembre_2018_）
以下に第８回フェスティバルのプログラムに掲載されたスラシックの「ヴァレリーに捧げる小抽象詩」の展覧会の解説文を掲げておこう。「スラシックは、色彩の選択と、テレビン油で溶いた粉末顔料（マンガンの菫色、ウルトラマリンの青、エメラルドの緑、コバルトブルー、ウルトラマリン・バイオレット）の使用によって、この海の風景や水との関係性、またそこから萌す感覚、さらに小さなヴァレリーテクストの抽象デッサンから生まれる感覚をも表現している。」（プログラム６頁）
なお、絵画展においてヴァレリーの詩の中でも「小抽象詩」をテーマに選んだのは、ミシェル・ジャルティによるという。ジャルティは、スラシックの画風も踏まえた上で、インスピレーションを生むに違いないと踏んだ作品を数あるヴァレリー詩の中から選択したのであろう。スラシックは、ヴァレリーの「小抽象詩」に深く心動かされ、また詩のタイトルがP.P.A.（Petits poèmes abstraits）のそれぞれの単語の冒頭のアルファベットを取ったもの）という抽象化された略号になっていることに、絵画における抽象とのパラレリズムを見て驚いたという。ヴァレリーのこの散文詩には、自然、場所、鳥の声、海、光といったものがある一方で、詩人のユーモアや孤独、悲しみや夢がこめられていると、スラシックは本講演で述べている。*PVM*.35.

[56] Anne Slacik « Petits poèmes abstraits (à Paul Valéry) » *PVM*.35-50.

代社会の好機となるものを共に経てきたのです。[57]

35年前に友人から贈られたリルケ・パステルナーク・ツヴェターワの三人の書簡集の感動を今なお保持している[58]というスラシックは、並々ならぬ文学の読み手である。「絵画の仕事の導きの糸は、しばしば詩を読むことからでした」[59]とスラシックは語る。「ステファン・マラルメ、ピエール・ルヴェルティ、パウル・ツェラン、ベルナール・ノエル、アンドレ・デュ・ブーシェ、ポール・ヴァレリーなどなど」とスラシックは絵画の導きとなった詩人たちの名前を挙げている。

スラシックは、自らの制作の源泉となったヴァレリーの小抽象詩を引用する。この部分は、絵画の作者による朗読の場面である。

ポリネジー[60]
静かな朝―日の出の頃の大いなる安らぎ―
命あるものは、ただ耳を劈く虫の声、陶酔する雲雀のみ
生まれ出ずる状態の熱気
この不動性をどう「表現」すればよいのだろう？
風景が絵画になる
沈黙と静止は造形芸術の条件である[61]（P.P.A.2に対応）

午前５時、青ざめた海―可能性に満ちかつ平坦で、現実感を欠いた海。空の下の方に向けて大量の水で濯がれ、空と一つに結び合わされ、永遠に不動になったかのような海。（P.P.A.3に対応）

海―平坦な―灰色がかった海。その大部分にさざなみが立ち、それは部分的に動いていることを示している。かゆみ。表面の凝集
波が形を取る。不動であるが、その素材は動いている。あるいは動いているが、その「素材」は「停滞」しているのだ。（P.P.A.6に対応）

---

[57] *PVM*.35.
[58] *PVM*.36.
[59] *PVM*.36.
[60] ヴァレリーがしばしば滞在したポリニャック侯爵夫人所有の別荘。
[61] *PVM* p.39.

スラシックは、ヴァレリーの「小抽象詩」から、同名のタイトルをもつ絵画「小抽象詩」１～８を制作し、このように２、３、６の絵画作品の元となった詩を朗読しているのである。絵画評論において、ほとんど抽象画について語らなかったヴァレリーが、確かに抽象画に親和性を持つと感じられる「詩」を残していることが実に興味深い。

スラシックは、絵画と詩の関係について語った講演を次の言葉で締め括っている。

> 絵画とはまさに呼吸の場であり、感動によってもたらされた自由の場なのです。マルク・ロスコ[62]はこう言いました。「問題は具象的か抽象的かということではなくて、両手を広げて呼吸することだ」と。『カイエ』[63]の中の散文詩は、ポール・ヴァレリーの一種のクロニクルであり、ヴァレリー工房の労作だったのです。ヴァレリーの散文詩は自由な思考の強力な証言であり続けています。[64]

スラシックは「詩」や「創造」といった言葉は用いず、このように「呼吸の場」「自由」という言葉で、絵画と詩を結ぶものを指し示そうとする。フェスティバルという自由な場にあって、スラシックの絵画と言葉は、来場者たちに沁み通っていくような印象を与えたのではないだろうか。

６．ヴァレリーのレミニサンスと現代の詩人たち

本フェスティバルでは、フランス国内外の現役の詩人たちがヴァレリーとヴァレリー詩のレミニサンスに寄せて自ら書いた詩が、音楽家とのコラボレーションで披露される。このフェスティバルにおいて、こうしたパフォーマンスは lecture poétique musicale（直訳すれば「音楽的詩的朗読」）と名指されている。ファタ・モルガナ社から刊行された『ポール・ヴァレリーと地中海』には、こうしたパフォーマンスに先立ってなされた詩人による短いスピーチも収録され

---

[62] 1903年生まれで1970年に死去したロシア・ユダヤ系のアメリカ画家。抽象表現主義運動の画家。

[63] ヴァレリーが1894年頃から1945年７月の死の直前まで、早朝の１～２時間の孤独の時間に執筆されてきた個人的な手記。各種フォーマットのノート261冊が残されている。その総体を『カイエ』*Cahiers* と称する。それらの文書は、ヴァレリーの死後公開され、この詩人の創造の現場を照らし出す、比類ないドキュメントであり続けている。

[64] *PVM*.50.

ている。これらは、オーソドックスな文学研究とはまた違った角度から、ヴァレリーとヴァレリー詩に光を当てるものとなっている。第８回のフェスティバルでのこうした詩人のスピーチの中から、とりわけ印象深い言葉を以下に紹介したい。

1956年生まれのギリシャの女性詩人であるリアナ・サケリウは「地中海文化とポール・ヴァレリーの詩についての考察」[65]と題して、自作詩の俳優パトリック・ヴァンドランとマリオン・ディアクのビオラによる「音楽的朗読」に先立ちスピーチしている。『ポール・ヴァレリーと地中海』には、サケリウのギリシャ語によるスピーチのフランス語翻訳が掲載されている。

サケリウは「ギリシャの詩人として私は、精神にとっても目にとっても広大なものである地中海の歴史の何千年かをポール・ヴァレリーと共有しています」[66]との言葉でスピーチを始め、ヴァレリーの長編詩「若きパルク」について「人生に枠組を与える意義を孕んだローマ人とギリシャ人の運命の感覚を描くことで、我々現代人に人生の意義を授けている」と評している。ポール・ヴァレリーは「永遠の相のもとに」物事を見ようとする詩人であり、地中海詩人であるヴァレリーにあっては、「海の青と空が無限と永遠の感情を形成する」とサケリウは述べている。サケリウが毎年夏を過ごすギリシャのパロス島にも海辺の墓地があり、そこで彼女は永遠の安らぎと限りない地中海との結びつきをいつも感じていたのだという[67]。サケリウはフェスティバルの会場であるポール・ヴァレリー美術館が地中海を見下ろすモン・サンクレールの丘に位置しているのが実に詩的だとも述べている。「海辺の墓地」は海を遠くに見渡し、自らがその一部になるかのようで、まさにヴァレリーの芸術と人生についての特徴的な視線を体現するものだとサケリウは指摘している。このようにサケリウはヴァレリー固有の詩的感受性に寄り添いながら、ギリシャ人の感覚に通じるものをも描き出している。

サケリウによれば、ギリシャの神話や文学において、航海は「人間の至高の経験」[68]であり、「生者と死者と神々の世界の間の、あるいは現実と想像力との間のコスモゴニックな境界」を意味するものであったという。ギリシャの神話や

[65] Liana Sakelliou « Réflexion sur la poésie de Paul Valéry et la culture méditerranéenne » *PVM*.171-174.
[66] *PVM*.171.
[67] *PVM*.172.
[68] *PVM*.173.

文学に通じているサケリウは、ヴァレリーの詩「海辺の墓地」を一読、まさに古代ギリシャのビジョンが息づいていると感じたのであった[69]。このようにヴァレリー詩のギリシャ的特質に論及しつつもサケリウは、ヴァレリー詩をギリシャの文脈にだけ回収することはない。このスピーチの最後では、「海辺の墓地」の詩が呼び覚ます詩篇として、ウィリアム・ブレイクの「無垢の予兆」« Auguries of Innocence » の断片が英語とフランス語の両方でサケリウにより朗読される。

一粒の砂の中に世界を見
一輪の野生の花の中に天国を見るには
君の手のひらで永遠を握り締め
一瞬のうちに永遠をつかめ[70]

もう一人の詩人のスピーチを紹介したい。チリ生まれパリ在住の詩人・教師・翻訳者・作文のアトリエのファシリテーターであるパトリシオ・サンチェス・ロジャスによる「ヒスパニック文学を通じたポール・ヴァレリー作品の発見」[71]と題されたスピーチである。ロジャスとヴァレリー作品の出会いは、チリの女性詩人ガブリエラ・ミストラルの詩集のフランス語翻訳版で、ポール・ヴァレリーの序文に触れたことがきっかけだった。ヴァレリーの序文は、ミストラルの作品を照らし出すのみならず、ヴァレリーの散文の文体自体が際立つものとロジャスには感じられた。ロジャスはヴァレリーが何者かについてはほとんど知らないまま、直ちにその文体に魅せられた。ヴァレリーの詩を読むに至り、光と自然、神話が主たる位置を占める詩人であることをロジャスは知ることになった[72]。

チリ生まれのロジャスは、パリ亡命前、ピノチェト政権下でパブロ・ネルーダも読んだという。それは日常的な抑圧から逃れるためだったとロジャスは述懐している。ネルーダの友人であるガルシア・ロルカもヴァレリーの詩の愛読者であった。そうしたことも、ヴァレリー作品の愛好に繋がっていったという。

ロジャスはさらに、ホルヘ・ルイス・ボルヘスの『他人』とヴァレリーの「テ

---

[69] *PVM*.174.
[70] *PVM*.173.
[71] Patricio Sanchez Rojas « La découverte de l'œuvre de Paul Valéry à travers la littérature hispannophone » *PVM*.225-231.
[72] *PVM*.226.

スト氏」には共通点が多いと指摘している[73]。

パリに亡命したロジャスにとって、ポンピドゥーセンター[74]が逃避の場となった。そこで読んだヴァレリーの「柘榴」の詩は、地中海の風が吹き渡っているようで[75]、ロジャスに強い印象を与えた。ロジャスはこの「柘榴」の詩を最も豊かな文学的美学の成果であると評している。また、ヴァレリーの韻文詩「歩み」にはガブリエラ・ミストラルのこだまを聞き取り、ヴァレリーの『旧詩帖』の「詩のアマチュア」にはアルゼンチンの作家、フリオ・コルサタルに通じるものを感じ取っている。ポンピドゥー・センターの図書館で読んだヴァレリーの「海辺の墓地」の終盤の２行「風が立つ、生きようと努めなければならない！／広大無辺な風が私の本のページを開き、閉じる」を引きつつ、ロジャスは以下のように語っている。

> 私のような亡命した者にとって、「海辺の墓地」の詩は、確かに、どんなにか暗い中にあろうとも光を見つけられるのだと教えてくれるものでした。ここにヴァレリーの魔法があります。[76]

亡命という実存的な不安の中でヴァレリー詩に救いを見出したロジャスは、ヴァレリーの詩に、ガブリエラ・ミストラルの「死のソネット」を思い、ヴァレリーはミストラルと同じ厳格さで死をとらえ、同じ実存的問題意識によって結ばれていると評する。ヴァレリーの地中海にまつわる詩から音楽と自然の重要性、書く行為の見事さと思考の深さ、厳格さを学んだロジャスは、自身で詩を書きたいという欲求を持つに至った。そのように振り返るロジャスにとって、今なおヴァレリーの知的厳格さは、ロジャスの模範（さらには伝達すべき人生の模範）であり続けているという。

このスピーチののち、ロジャスは、自作の詩をフレデリック・ソネによるフラウト・トラベルソ[77]の演奏と歌とコラボレーションしつつ、朗読した。ロジャ

---

[73] *PVM*.226.

[74] パリのボブール地区にある工場や工事現場を思わせるような外観が目を引く文化複合施設。設立時の大統領ポンピドーの名に因む。美術館、映画館、レストラン、美術関連ショップ、それに入館に特別な資格も料金も必要とせず、すべての書物が開架に並んでいるオープンな図書館を備えている。

[75] *PVM*.228.

[76] *PVM*.230.

[77] 本フェスティバルの「音楽的詩の朗読」において登場するのは、チェロ、ビオラ、フラウト・トラベルソと歌である。

スは、スピーチにおいて、極めて平易な言葉で語っていたが、チリからフランスへの亡命の人生を辿ったロジャスにおけるヴァレリーの文学とヒスパニック文学の交差は、痛みを伴った重みと、また逆説的な明るさをも感じさせるものである。自作詩の音楽的朗読のパフォーマンスも聴衆に強く印象付けられたことだろう。

7．ヴァレリーとコルシカ、そして一族の物語

第８回のヴァレリー・フェスティバルは、コルシカにも三つの会場を設け、歴代のフェスティバルの中でも、最も登壇者の多い回となった。ヴァレリー研究において「コルシカ」はこれまで議論の中心になることはほとんどなかった。コルシカは、ヴァレリーの父バルテルミーの故郷であるが、バルテルミーは、フランス本土にわたり税官吏としての人生を歩み、モンペリエの地にてジェノヴァの貴族グラッシ家に連なるイタリア領事の娘と出会い、身分を超えての結婚を果たし、生まれた次男がポール・ヴァレリーである。ヴァレリーは、母の故郷であるジェノヴァにバカンスのたびに滞在し、イタリアの出自に親しみと誇りを抱く一方、父方の故郷コルシカには、４歳の時（1875年ないし1876年）と1929年の二度訪れた[78]のみで、コルシカについてのまとまった文章も残していない。それゆえ、「ヴァレリーとコルシカ」というフェスティバルのテーマを立てたものの、当初は、このテーマでの登壇者は集まらなかったという[79]

しかし、シンポジウムは、コルシカ大学の研究者を中心にタグが組まれ、ヴァレリーの思考の古層にあるものに光を当てることに成功している。おそらく、コルシカでのフェスティバルの成功は、1935年10月26日付け『コルシカ便り』に残されていたヴァレリーの談話の以下の記録の存在に辛くもかかっているのではないだろうか―

> 超地中海　Surméditerranée
> コルシカ、それは超地中海です。それは、アッティカの光の透明性と、イタリア・スペイン・アフリカの残虐さと暴力性の場所とが出会う幾何学的な場所です。コルシカは、それら全てを集約し調和させているのです。こ

[78] *PVM*.430.
[79] *PVM*.419.

こに地中海におけるコルシカの役割と使命があります。[80]

これは1935年に、ヴァレリーがコルシカの地方紙『コルシカ通信』のインタビューに答えて残した談話である。南仏ともイタリアとも異なるコルシカの自然について、ヴァレリーは言及している。「地中海」のイメージと分かち難く結ばれた詩人であるヴァレリーの口からコルシカが「超地中海」と名指されたことは重みを持つ。とはいえ、ヴァレリーの生涯を見渡してもコルシカについての言及はまことに限られたものなので[81]、研究テーマとして展開していくことには困難が予想される。むしろ、あれだけ何についても書いていたヴァレリーが、なぜコルシカについてほとんど書いていないのか、という問題を立てることができるだろう。

文献的な手がかりがほとんどない中で、ヴァレリーの血がコルシカにまで遡ることは厳然たる事実であり、またヴァレリーの血を継いだ孫たちの当シンポジウムでの存在が、葬ることのできない血筋のテーマの意義を投げかけている。ヴァレリーの孫たちは、セートでのシンポジウム「ポール・ヴァレリー　その地中海的起源」[82]とコルシカでの「コルシカのヴァレリー」[83]の二つのシンポジウムに登壇している。彼らの言葉に耳を傾けてみよう。まず、アントワーヌ・ヴァレリー[84]は次のように語っている。

> ヴァレリーについては、墓しか残っていません。墓に参るときには、全く訳のわからないことと、同時に完璧に感じられることとが起こりました。父はヴァレリーのことを感嘆とアイロニーとを込めて語ったものでした。私たちは反駁の余地なく祖父の精神が身に染みています。それを伝え続け

---

[80] Le 26 octobre 1935, *Le courrier de la Corse*.

[81] コルシカについてヴァレリーが触れたものに、以下の談話がある。「私はコルシア人の子供なので、自らのうちにそうした血をよく感じていました。それを私の思考や心の中にあるエッセンスであると感じていました。コルシカ島で直接に汲むことのできないエッセンスですが、そこから発するものや伝統を受けつぎました。例えば、コルシカ人である父から、また父が私に授けた教育からです。」(1927年２月３日の*Petits Marseillais*に掲載されたヴァレリーの談話)

[82] Martin Boivin-Champeaux, Paola Cattini, Jean-Luois Ciannni, Françoise Graziani, Charles-Ambroise Valéry, Antoine Valéry, « Paul Valéry, ses origines méditerranéennes » *PVM*.233-245.

[83] Martin Boivin-Champeaux, Francine Demichel, Orlando Foioso, Patrizia Gattaceca, Françoise Graziani, Marie-Antoinette Maupertuis, Jacques, Orsoni, Antonietta Sannna, Jean-Guy Talamoni, Jacques, Thiers, Antoine Valéry, Maithé Vallès-Bled « Valéry en Corse » *PVM*.419-454.

[84] Antoine Valéry.ヴァレリーの長男クロードの長男。弁護士。

ていければと願っています。[85]

歴史的な偉人を祖父に持った人間のある種の居心地の悪さと、聴衆への誠実さが同時に感じられる発言である。アントワーヌに次いで発言したのは、シャルル＝アンブロワーズ・ヴァレリー[86]である。以下に発言を訳出する。

> 私もアントワーヌと同じ思いです。わたしたちは、地中海には特別の親しみと魅力を感じています。それはおそらく普遍的なものなのでしょうが、わたしたちにとっては特別な響きがあります。私にとって、それは一種の失楽園なのです。コルシカとセートは一族の感性と歴史の全てを領しています。それゆえ、私はその影をしか掴めていないという気がしておりました。生身のヴァレリーに会う機会はなかったのですから。[87]

因みに、アントワーヌもシャルル・アンブロワーズもパリ生まれでパリに暮らしている。祖父ヴァレリーのイメージに結びついたセートや、さらに先祖の暮らしたコルシカを「失楽園」と感じるというこの発言には、首都で生活してきた人間としての思いも反映しているだろう。さらに、シャルル・アンブロワーズの発言を訳出する。

> 地中海は、私にとっては、神経のディシプリンであって、一つの脳に似て閉じた回路であり、また同時に交換のシステムでもあります。ことに、文明と宗教を生み出すシステムであり、可能性のシステムであります。それが地中海を驚くべき文化の場としているのです。交換とは、可感的な認知的意識の一種の起源なのです。[88]

脳神経外科医ならではの比喩なのであろうか。ヴァレリーの表現に通じる明晰さ、切れ味の良さが見てとれる。

シャルル・アンブロワーズは、父クロード[89]が、ヴァレリーの重みを乗り越

---

[85] *PVM*.233.
[86] Charles-Ambroise Valéry.ヴァレリーの長男クロードの次男。脳神経外科医。
[87] *PVM*.233.
[88] *PVM*.234.
[89] Claude Valéry.スポーツ雑誌の編集者を務めた。

える難しさに面していたと発言している[90]。またヴァレリーの長男であったクロードと次男のフランソワはライバル意識が強かったとも語っている。半ば伝説と化したかのようなポール・ヴァレリーの末裔たちの、我々凡人にも身に覚えのあるような苦悩をも知り、ヴァレリーの存在そのものも少し近くなったように感じられる。

以上は、セートの会場での孫たちの発言であったが、以下にコルシカの会場での孫たちの談話に触れたい。この談話の場には、コルシカ大学の研究者が同席し、ヴァレリーとコルシカの関係について指摘している。ジャン・ギ・タラモニは「彼自身の知らない何かに対する間接的なノスタルジー」[91]があったと語り、フランソワーズ・グラジアーニが「コルシカでは沈黙が大切にされており、バルテルミーからヴァレリーに、そうした継承があったのではないか」と示唆すると、アントワーヌ・ヴァレリーは驚くべき率直さで「ポール（ヴァレリー）とその子供との間にコルシカ的な伝統の継承はありませんでした」[92]と発言している。ヴァレリーやその子孫にコルシカ的伝統の継承を見出そうとするコルシカの研究者たちへの忖度のなさは痛快ですらある。

アントワーヌは、バルテルミーがコルシカ占領の代表者たるジェノヴァ上層部の娘と結婚したこと自体驚くべきことであると指摘し、そのためバルテルミーは、コルシカとの意識的断絶をはからざるを得なかったのではないかと想像を巡らせている[93]。談話には、ヴァレリーの孫娘であるマルティーヌ・ボワヴァン＝シャンポー[94]も加わり、ジェノヴァの母方の雰囲気は一族に存在感があったものの、コルシカにまつわるものは何もなかったことについて証言している。ここから浮かび上がってくるのは、バルテルミーのコルシカからの徹底した断絶である。しかし、それだけではなかっただろう。アントワーヌは「ヴァレリーには向上心があったため、イタリア出自のことは明かしても、コルシカのことは明かさなかった」[95]と指摘している。あまりに率直なアントワーヌの発言が、

---

[90] *PVM*.236.
[91] *PVM*.436.
[92] *PVM*.438-439.
[93] *PVM*.438.
[94] ヴァレリーの長女アガートの長女。画家・彫刻家。著作に*La Cuisinière de Mallarmé*, Editions de Michel de Maule, 2012.（『マラルメの料理人』ミシェル・ド・モーヌ社、2012年）がある。
[95] *PVM*.441.

コルシカの人々の神経を逆撫ですることはなかったのか、気になるところだが、ヴァレリーの中にそうした自己規定あるいは、自己呈示にまつわるある種のバイアスがあったことも否定しきれないだろう。

この談話会に続いて、レクチャー・コンサートが行われ、ジャキュム・チエールにより初めてコルシカ語に訳されたヴァレリーの詩集『魅惑』の12編を歌詞とする歌曲をパトリチア・ガッタセサが披露した。ポール・ヴァレリーの存在は、そのようにして時を超え、形を変えながら人々を包み込むのである。コルシカというヴァレリー自身にとっても遠い淵源であえてフェスティバルが開催されたことで、文化の伝承や混淆について、新たな気づきを得た参加者も少なくなかったのではないだろうか。

おわりに

以上に、第８回のポール・ヴァレリー・フェスティバルについて、主に講演記録である『ポール・ヴァレリーと地中海』に依拠しつつ論じてきた。残念ながら、フェスティバルで行われた音楽的朗読や、ミニコンサート、ヴァレリーの構想した唯一の楽劇「アンフィオン」の演出家オルランド・フォリオーソの新解釈による「テアトリユーロップ」の上演などについては触れることができなかった。

フェスティバルは、ヴァレリーについての地道なあるいは、優れた視点による研究の成果、ヴァレリーにインスピレーションを得た創造活動、作家にゆかりのモノ・コト・ヒト・場所について知ること、それらを通してヴァレリーにオマージュを捧げる友愛の営みである。関係者の準備の苦労はさぞかし大きいだろうが、こうしてフェスティバルが続いていくことは誠に慶賀すべきことである。モンペリエ大学から1974年より発行されていたヴァレリー研究の国際的専門雑誌*Bulletin des études valéryennes*（『ヴァレリー研究会報』）が2006年を最後に廃刊になったのは寂しい限りだが、フェスティバルの成果から毎年編まれる刊行物は、その欠落を補って余りある。参加者それぞれにヴァレリーの存在を感じとることのできる当フェスティバルの末永い存続を願う。